

太秦広隆寺の創建

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

広隆寺には仏像彫刻国宝第一号として知られる宝冠弥勒、泣き弥勒の二体の弥勒菩薩半伽思惟像が安置されている。この広隆寺には数多くの謎がある。そもそも広隆寺はいつ創建されたのか。

『広隆寺来由記』には広隆寺の隆は秦河勝の実名、広隆だとされるが、いつ頃この寺名が成立したのかも定かではない。広隆寺という寺名が文献上に現われるのは、『朝野群載』に載る承和五年(838)の『広隆寺縁起』が初見であり、弘仁九年(818)の焼亡を記した『日本紀略』には秦公寺とある。これ以前には広隆寺という寺名は文献には見当たらない。しかし製作年代が飛鳥時代に遡る仏像彫刻が伝世することや、旧境内地から飛鳥時代、奈良時代、平安時代の瓦片が出土することは、太秦広隆寺の淵源が飛鳥時代に遡り、連綿と時の流れを経て来たことをうかがわせる。

たとえば、『日本書紀』には秦河勝が推古十一年(603)に聖徳太子より仏像を拝受して蜂岡寺を造営したとあり、推古三十一年(623)には新羅から送られた仏像を葛野秦寺に安置したと記されている。また『聖徳太子伝暦』や『広隆寺来由記』にも寺院の沿革や由来が、聖徳太子の上宮王家と秦河勝の統率する山背秦氏との深い関わりを



現在の太秦広隆寺 旧境内はさらに広大なものであった。

示す記事として随所に認められる。一方、前述の『広隆寺縁起』には、広隆寺・秦公寺・蜂岡寺と名を併記して、当初、九条河原里・荒見社に所在していた広隆寺を、その後五条荒蒔里に移したと記されている。蜂岡寺や葛野秦寺、秦公寺、広隆寺と称されるこの寺の変遷は依然深い霧の中を漂う。

ところで昭和11年(1936)、同じ葛野郡内にある現在の北野白梅町で土地区画整理工事中に飛鳥時代前期の瓦類が発見され、北野廃寺と名づけられた。現在までに

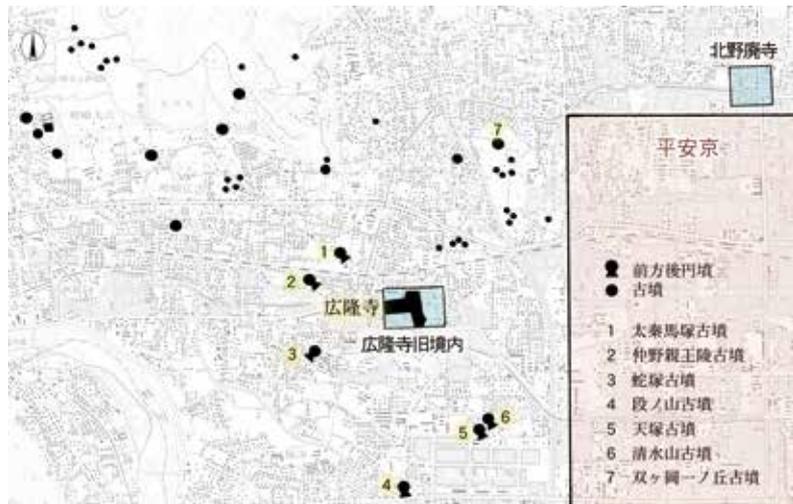
飛鳥時代前期の溝・建物・柵などの遺構や、推古四年(596)に創建された法興寺(飛鳥寺)と同系同文の軒丸瓦が出土している。このことは、広隆寺の辿った道の解明に一筋の光明をもたらした。

他方、太秦蜂岡町の広隆寺旧境内からは、これよりやや遅れて創建された四天王寺や法隆寺(若草伽藍)と同系同文の軒丸瓦の出土がある。またこの下層や周辺地区では7世紀前半の竪穴住居跡も多数発見されている。更に特筆すべきは、この同じ地区から6世紀前

半の円筒埴輪片の出土が相次ぐことが挙げられる。この埴輪片は旧境内を取り巻く形に配置された6基の前方後円墳のうち清水山古墳、天塚古墳の周濠から出土した円筒埴輪に胎土や調整手法が似ており、これらの古墳に供給された円筒埴輪が旧境内で製作された可能性は大きい。

では、この太秦蜂岡町の地に寺院が造営される以前の6世紀代、ここはどのような場所だったのか。

旧境内下層から出土した円筒埴輪片と周辺の夥しい古墳群の存在は、この地区の性格を明瞭に物語っている。この地の周囲に築かれた前方後円墳や台地の円墳群、山麓の古墳群に対応した造墓、葬送事業の実施には周到な計画や準備が必要であり、これを保障する基地的な場所が不可欠である。また、この地区と周辺地区には、6世紀代に属する住居跡や土器類は現在のところ検出せず、居住空間として利用された形跡が見当たらないことから旧境内地は必要な資材や労働力を準備し、各種の事業を企画実行する葬祭儀礼センターとでも言える地区であったと考えることができる。また葛野郡全域を版図とし、紀伊郡、愛宕郡、乙訓郡にも勢力を



広隆寺旧境内、北野麩寺の位置

拡大した山背秦氏の祖霊を祀る祖廟的な施設の存在も併せて想定できよう。旧境内地にある大酒神社や周辺に位置する蚕ノ社(木島坐天照御魂神社)として知られる秦氏の祖先神や氏神の存在からもこれを肯じられる。

このように太秦の地は、秦氏が葛野郡に拠点築いた5世紀後半以降もなく、氏族にとって特別な地域として重視された。7世紀前半代に至ると、瓦類を使用したなんらかの建物がこの台地の一角に建設されたと考えることができる。北野麩寺の建物の成立はこれよりやや早く、6世紀末から7世紀初めに置くことができる。このことから、7世紀前半に山背国葛野郡には寺と称されるものが二箇

所にあったとすることができる。前者を葛野秦寺あるいは秦公寺、後者を蜂岡寺と呼び分けたとも考えられる。無論、この時点で両者共に伽藍のすべてが整っていたとは思えない。しかし、推古三十年(622)の聖徳太子薨去以来、太子の追善供養に端を発し、天智九年(670)に斑鳩寺(法隆寺)から百済入師を葛野蜂岡寺に迎えた頃には、両者ともに寺院としての体裁をほぼ整えたと考えられる。太秦にある葛野秦寺(秦公寺)は、奈良時代に属する瓦類の出土が減少し、やや寺運の衰えを感じさせるが、桓武天皇による平安京遷都にあたって、蜂岡寺を葛野秦寺(秦公寺)のある太秦の地に移転・合併を果たし、二体の弥勒菩薩像は一箇所に安置されることになったものと考えられよう。こうして宇多川(御室川)を渡り、蚕ノ社の森の西方、太秦台地の南端に大門を構えた伽藍を整備し、名実ともに太秦広隆寺としての一步を踏みだしたと言える。

(平田 泰)



鳥羽遺跡出土の円筒埴輪



旧境内から出土した円筒埴輪片

* 広隆寺の縁起については他に諸説がある。